

安富助教
敦異抄（三・四回生）

延塚助教

編集後記

『親鸞教学』第60号をお届けいたします。本号は特に発刊が遅れましたことをお詫び申し上げます。

池田勇諦先生の論稿は昨年度の真宗学会大会での発表に基づいての書き下ろし原稿です。また井上円先生から藤場俊基氏の『顕浄土方便化身土文類の研究―弁正論―』の書評をいただきました。神戸和暦先生、延塚知道先生、藤原正寿氏には、それぞれの現在の研究成果を発表していただきました。また来年八月に大谷大学を会場として国際真宗学会の第六回大会が開催されますが、一楽真先生には昨年度のアメリカでの大会について報告していただきました。編集部としては、今後とも真宗学徒に課せられている現在の課題を見据えつつ、研究を中心とした学会活動の活性化に向けて、『親鸞教学』の紙面を充実していければと思っております。

近年、日本の大学ではカリキュラムの

大綱化を中心に大学の点検・見直しが進められている。そのことの是非と評価については様々の意見があるが、大学での教育・学問研究の在り方が大きな転機を迎えていることは確かである。『親鸞教学』も本号で60号となり、三十年の歩みをしてきたことになる。その間、何度か「真宗学とは何か」という問いが提起され、特集号が組まれたこともある。近代・現代における諸学と対抗しつつ「真宗学」の持つ独自性とその役割が問題となった。真宗学の場合には「真宗学とは何か」という問題が、学びの中で常に問われ続ける性格の学である。なぜなら学ぶ主体が、同時に教法における変革の対象となっているからである。したがって一般論として「真宗学とは何か」を定義づけることは、一応の表現としては可能であろうが、最終的には自らが真宗学徒として学ぶなかで確かめるべき性格の問題である。

大谷大学が文部省認可の大学となるに際して、「真宗に学が必要か」という問いを受けて、金子大栄先生が講演された記録が『真宗学序説』として刊行されているが、そのなかで先生は「親鸞を対象

として学ぶのではなく、親鸞も真宗学徒であって、親鸞が学んだように学ぶのが真宗学である」と述べられている。現代においては近代における世界観や価値観が問題視されているので単純には言えないが、金子先生当時の学一般の在り方は全てを客観的に対象化して分析統合していくことで、対象を把握しようとするものであったであろう。『真宗学序説』に述べられる主張が当時の研究者にどのような評価を受けたかはわからないが、親鸞と課題を共有化しつつ、「真宗」を学ぶということは、主体を殺して静的に物事を把握するという学の在り方（そのことは学のみならず、近代から現代にかけての人間の物の見方を貫通しているとも思うが）ではなく、学ぶ主体を賭しての実践としての学ということである。学という以上、文献を厳密に読むこと、関連する諸思想に触れていくことの重要性は言うまでもないが、それ以前に学の課題の主体的確かめが、真宗学の出発点にある基軸であることを思う。

（文責・安藤）